

第10章 20世紀日本語の英語化

カール・ベッカー

始めに：言語の自然進化

世界中の言語を歴史的に研究すると、各言語はそれぞれの構造や特色を有しているものの、全ての言語に当て嵌まる進化論上の原則が幾つか目立っている。例えば、同じ現象を表すのに言語が難解な表現からより簡単な表現へ、特に発音上、より複雑な発音からより簡単な発音へと進化してゆく傾向にある。又、同じ物事を意味する二つ以上の表現が同時に存在する場合に、その内の一つの言葉だけが広く活用され、他の同意語が廃れる傾向にある事も、周知の通りである。同様に、世界の全ての言語が象形文字から音標文字へと変化する運命にあり、現在台湾と日本を除く全世界が実質上音標文字に変化してきており、日本でも音標文字化を意味する仮名化が激しく進行しつつある。

又、「A」と「B」という二つの文化が出会う際には、言葉も出会い、交じり合うのである。その中で、「A」には無い物事が「B」にある場合、「B」の物事自体を導入するに連れて、その物事の名称（言葉）を「B」から外来語として取り入れる傾向は何時代でも見られる現象である。「B」という文化が強ければ強い程、或いは魅力的であればある程、「B」の言葉を始め、表現、文章、そして教育を通じて論理構造まで、「A」という文化に対して、大きな影響力を持つ事は言語学会の中で最早常識になっている。例えば、アーリアン語が古代インドから中央アジアまでサンスクリット語の様な形跡を残したが、「アーリアン」という名称自体が「支配者側」を意味する訳である。又、地中海周囲のラテン語、東アジアに渡る漢文、西南アジアからアフリカにかけるアラビア語、南米のスペイン語や北米の英語もその例になろう。これは軍事力、植民地、強制教育等による場合もあるが、異文化の平和な出会いによっても自然に起きる現象である。貿易に利益のある言語が、断然に流行する傾向にある事は、決して最近のみの現象ではないのである。

時として、或る政府や軍隊が言語を支配する企画を組むが、言語学的見地からすれば、言語の自然進化に沿うもののみが見事に成功するのに対して、前述の様な進化に反する政策は長続きしない運命にある。例えば、韓国のハングル化、中国の略字・音標字化、或いは日本政府の仮名化がその成功例に入る。それに対して、旧朝鮮に於ける強制日本語化、フランスや戦前日本の反英語運動、或いはパプア・ニューギニアのドイツ語政策等も皆失敗に終わっている。北朝鮮やアルバニアの様に、政府がマスコミを完全に独占しない限り、隣国との言語が必ず影響

し合う。技術、貿易、教育等に有利な言語が必然的に増加する事が自然言語の進化形態である。

日本語の英語化

本論文では、影響し合う言語の中でも、取り分け日本語の英語化を一例として詳細に分析してみたい。網羅的に研究する為に、学術雑誌総合索引による学術記事検索と、英文に概要が載る Sociofile や PsycLit の 1996 年データベースを利用した。関係しそうな 100 件位の記事の中から、特に日本語の変化に関するものを挙げ、その理論と事例を整理して纏める事にする。尚、明治時代以降の変化に限定して焦点を合わせるが、日本語の英語化論争は特に明治中期と 1960 年代に流行った様子も伺える。この数十年、学術雑誌の中で、この様な研究は余り中心的とは言えないのが現状の様である。

無論、日本人は英語を勉強する遙か以前からも、外国との交流の頻繁な時代程、外国語の影響が大きかった。東北地方の地名はアイヌ語、北陸や湖北の地名は渡来人の言葉、大和盆地（奈良等）の地名は韓国語に由来する事もその一例である。又、佛教や学問を初め、あらゆる抽象的概念、政治、経済等についての言葉が漢語から借用された。大和言葉だけでは（ポリネシア語と同様）、何の学問も記述できなかったからである。しかし、漢文の歴史が千年余りに互っただけに、オランダ語や英語を取り入れる土台が日本の漢学者の中でしっかりと根付いていた。日本語と比べ、中国語の順序や秩序は偶然にもオランダ語や英語の秩序に近かった。従って、返り点を付け、助詞を適当に挿入する事に既に慣れていた漢学者は、違和感無くオランダ語や英語の秩序にも取り組んできたのである。本論文では、漢学者が築いて来た、英語を取り入れる言語的基盤については、これ以上述べられないが、重要な役割を果たした事を指摘しておく。

以下では、明治時代の日本語が現代日本語になる為に、どの様に英語の影響を受容して来たかを理解する上で、次の様な枠組や領域について考慮しよう。

1. 表記法の進化
2. 外来語、慣用句等の進化
3. 主語の進化
4. 動詞の進化
5. 英語的発想によるその他の特徴
6. 展望

では、事例を挙げながら、以上の点を順に察してみよう。

1. 表記法の進化

[1.1] 言葉や文法の進化を詳細に考察する以前にも、日本語の表記法の進化が目にと留まるであろう。先ず右左書きが殆ど完全に無くなり、そして縦書きが極端に減少している。手書きでさえ、ローマ字やアラビア数字を記入する場合、左右書きが最も便利である。尚、ワープロや

コンピューターの時代に入ると、画面上、右左書きや縦書きを組む技術が随分と割高になってしまう為、大手の新聞雑誌を始めとして、大多数の出版社はコンピューター化と共に左右書きに変化しつつある。

[1.2] 旧漢字自体が随分と略字化され、より少ない画数で新漢字を書く様になった。そして「教養漢字」、「当用漢字」、「常用漢字」等と、印刷物や人名に使用して良い漢字を大幅に制限し、書順も簡単になってきた。

[1.3] 平仮名や片仮名も合理化された。旧仮名には、同音異字のものが沢山あったのに、「お・を」と「は・わ」を除いて、「ゐ」「ゑ」等の旧仮名の同音異字は皆姿を消し、現代東京の日本語により近い発音で標準化された。

[1.4] その代わり、新しい仮名表記法も現われた。小さな「あ、や、い、ゆ、え、お、よ、つ」及び濁音点が、日本語の発音を標準化する為のみならず、年毎に増加する外来語を発音する為でもあったのである。

[1.5] 旧漢字と旧仮名を改めただけではない。文部省の指示の下、送り仮名を増やし、「こんにちば」から「ありがとう」まで「有り、在り、成、也、非、不」、副詞の「既、僅か、尤も、乍」や文末の「事、筈、訳、程、等」を皆仮名で表記する様になった。これも英語の二つの影響と言わざるを得ない。一つには、漢文や象形文字から遠ざかり、発想的に英語に近い音標文字の出現でもあったが、同時に、日本人が英語等の外国語を中学校時代から勉強する様になったのにつれて、漢字を練習する時間が減少し、結果的に漢字教育がおろそかになってしまった訳である。譬えるならば、スペイン語がアメリカの第二言語に成るにつれて、アメリカの子供達がスペイン語を勉強する代わりに、自分の古典語と言うべきラテン語を勉強しなくなったのと類似の現象であろう。

[1.6] 句読点は元来、日本語に無かったが、漢文を読むに当たって、文人が自分なりに返り点や句点を付けていた。明治20年までには、句読点の多い英語の影響を安易に受けた教科書の為に、日本語の中でも句読点が一定してきた。(古田 90、柳父 46) その後、あらゆる接読点、カッコ、感嘆符、疑問符、等が、それぞれの用法と共に、日本語に定着してきたのである。

[1.7] 明治時代の簡条書きを見れば、それぞれの行(列)は「一、一、一」で表記されている事に気付く。しかし英語の影響を受けた結果、アウトラインを最初に「イロハ」で書く様になり、続いてローマ数字、アラビア数字、又「ABC」を使用するに至った。アウトラインという論理構造自体は勿論の事、簡条書きを「123」・「ABC」と書く事も英語の影響の他無いのである。

2. 外来語、慣用句等の進化

[2.1] 二つの文化や言語が接触する度に、お互いに存在していなかった言葉を借り合うのが通例であるが、日本語は非常に多くの外来語を持っている。これは日本語の長所であり、次から次へと新しい現象についていける秘訣でもあろう。1917年当時、漢語を除いても、日本語は外来語を少なくとも6800語程有していたのに対して、50年経った1971年までにその三倍、

75 年経った現在ではおよそ四倍に及んでいる。(藤田、最新の辞典を参照)

[2.2] 外国語をそのまま日本語に導入するのみならず、日本語に無い概念を取り入れる為に、いわゆる和訳語を沢山造って来た。有名な例としては、西周の「宗教」、福沢諭吉の「演説」、フロイト訳に使用される「自己、自身」、そして政府の「白書、黒字」等が挙げられる。又、至る所で見られる「手洗い」という表現も、英語の影響から昭和以降の日本語となったそうである(藤田 361)。

[2.3] 外来語や和製語以外に、英語を翻訳するのに困難な表現はいくらでもあるが、一つの「政策」は直訳をし、たとえ奇妙な日本語になっても、読者に慣れさせる手である。明治まで存在しなかった慣用句を幾つか取り上げてみてもこの事をよくご理解戴けよう。

as far as I know	浅薄なる余の知る限りに於ては	藤田 363
as much as/so much that	こと程さように	喜多 44/ 吉田 90
too- to-	すべくあまりに...である	吉田 90
from a ___ point of view	の見地からすれば	吉田 90
the more, the more	すればするほど益々多く	吉田 90
be worth ...-ing	に価する	吉田 90
take into consideration	考慮に入れる	吉田 90

もしも現代の日本語読者がこの様な表現を違和感無く読み入れて戴けるのであれば、それは如何にその「慣れさせる」政策が成功しているかの証明になるのである。

[2.4] 慣用句と外来語の中間的な存在として、英語からの接頭辞と接尾辞が挙げられる。英語の接頭辞や接尾辞の代わりに、それに近い日本語を元日本語の言葉に付ける事によって、不自然な日本語でも、より英語に近い意味合いを出す事が出来る様になった。例えば (皆喜多 44)

接頭辞

in-, un-, non-	不、非	不自然、非自然主義
anti-	反、抗	反民主主義、抗癌剤
super-	超	超多忙、超特急

接尾辞

-self	自身、自体	彼自身、物事自体
-ism	主義	自然主義、自由主義、利己主義
-ty, -ness	性、さ	实在性、現実性、時事性
抜群さ、ショッキングさ、デリケートさ (吉岡 68)		

[2.5] 又、訳語そのものとは言えないとしても、どの名詞にも「～的」、「～っぽい」を付ける形容詞化も、英語の -tic, -ive 等に由来するものであろう。(皆喜多 44) 一昔前は、「客観」や「印象」等の言葉にも「的」を付ける事に抵抗があったそうであるが、英語の「objective, impressive」等を参考に、「客観的」、「印象的」等の日本語が便利に出来たばかりか、しっかりと日本語として根付いて来たのである。そして、英語の発想を更に発展させて、様々な言葉に添付する様になった。面白い例には、「バランス的」、「タイム的に」、「問題的」、「フェミニス

トっぱい」、「平和愛好っぱい」、そして「敗戦国が何を言うかの態度を示した時」(吉岡 68)等が見受けられる。

[2.6] 慣用句の一種とも言えるかも知れないが、元々日本語に存在する動詞を、英語的に使用する例が特に最近目立っている。例えば、

have → 持つ	会議が持たれる、パーティーを持った	古田 90
	理解を持つ、集会を持つ	喜多 44
take → とる	責任を取る、食事を撮る、写真を撮る	藤田 361
	休息を取る、出席を取る	喜多 44
pay → 払う	尊敬を払う、注意を払う、罰を払う	研究社

以上、いずれの表現も昭和以降の日本語にしか無く、明確に翻訳の影響を示すものであろう。

[2.7] 尚、動詞ではなかった日本語に「する」をむりやり句付けて、名詞を動詞として利用する事も、英語の真似と言えよう。例えば、「タイムズは勝利した」、「狂気する」、「付録する」(吉岡 67)等、いくらでも思い当たるものであるが、中でも明治時代の辞典を参照しないと、その名詞が動詞として使えなかった事さえ分からないものもある(吉岡 67)。

[2.8] 従来日本語なら副詞で表したものを名詞構文で表す慣習も明らかに英語の影響の一つである。英語の with を表す為に、「もって」、「共に」、「そばに」等である。例えば

親切にも → 親切さをもって	吉岡 66
忍び笑い、→ 忍び笑いと共に	吉岡 66
敬具 → 愛を込めて	NHK
神仏のお蔭で → 神はそばにいた	NHK

等である。以上の表現はいずれも元々の日本語には無く、英語を直訳する為に日本語に浸透してきたのである。以下では、より詳細に他の進化を考慮してみよう。

3. 主語の進化

[3.1] 本来、日本語において「主語」という発想は大変希薄であった様子である。話者と聴者が何も言われなくても、お互いに分かっているという前提の上に立った関係が非常に多かったので、主語の明確化は考えずに済んだのである。しかし、他言語、特に英語においては、主語が各文章の中心とされている。その様な英語を和訳すると、日本語にも主語が付いたり、又は日本語を英訳する場合も、主語が要求される様になってしまう。むりやり主語を付けようとする傾向は必ずしも好ましいとは言い難い。分かりやすくなる時もあれば、ドイツ語の様に分かり難くなってしまう時もある。例えば次の例：「私は吉田首相は日本の保安隊は軍隊でないと言っておるのを聞いて…」(喜多 40)。このくどさにも拘わらず、英語教育の結果として、少しずつ日本語でも主語を付ける様になった。

[3.2] 主語の付け方及びその進化は、少なくとも四段階に互って見られる。即ち

(3.2.1) 「{長文} だと信ずる」は原形とすれば、主語を付けると

(3.2.2) 「我々は {長文} だと信ずる」(喜多 42) に進化し、更に

(3.2.3)「{長文} だと我々は信じる」そして又、最も英語らしく

(3.2.4)「私達が信じてる。{長文} だ」

これは明らかに英語の We think ... の直訳であろう。『雪国』(1935)の時代からこのような日本語が少しずつ見られる様になった。「島村は聞き覚えている」、「靖二郎は思った」等である。(藤田 365)

尚、言われている事や考えられている事をカッコによって明確に区別する事もやはり英語に起因するところである [1.6]。但し、本来の英語ならば、We think ... 等を余り付けずに、直接思う事を断らずに言うのみであるのに対して、絶えず「私は思う」を付ける慣習がすぐには日本語から消え去る事は無かろう。

[3.3] 直接・関節話法でない文章でも、[3.1] の様に日本語の文章が比較的長く、文頭に置かれる主語とその動詞が離れ過ぎて解り難い例も少なからず出現した。その対策の試みとして、動詞の直前に「それは」を繰り返す事態も生じた。例えば「…現代学生気質のそれは一つの知恵だろう。」である。(吉岡 65) 日本語の長文が更にくどくなる一方である。それに対して、長文より短文が名文として好まれる傾向が現代英語に強い事は、周知の通りである。従って、和文も英語の影響を受けるにつれて、長文を減らし、文章自体を少しばかり短文化している様に見受けられる。

[3.4] 比較形

(3.4.1) 比較形を考えると、一昔前の日本語であれば、「京都の夏は東京より暑い」と極く当然に言えたのに、英語比較形と論理学の影響で「東京の夏より暑い」と最近訂正される様に至っているそうである。或いは、漱石が書く如く、「余が英語に於ける知識は漢籍に於けるそれに劣れりとは思はず」とある。従来の日本語であれば、「漢籍に劣れり」と書き、「知識」は「漢籍」に対処されるのではなく、「漢籍の知識」と対処されている事を読者の想像に任せた筈である。しかし英語の論理的発想の知っていた漱石がわざと「に於けるそれ」を加え、日本文でもまるで英語和訳かのような文を綴ったのである。(藤田 364)。

比較形の中では、英語的論理が明瞭になってくる。例えば、

(3.4.2) one of the most 「この雪国でもっとも暮らしの楽な村の一つだ」、

(3.4.3) the further ... the better 「船が岸を去れば去る程いい心持ちがした」、

(3.4.4) more than 「個人の意志よりも、より大なる意志に支配せられて」(藤田 362) 等を挙げられる。下手をすると、誠にやっかいな、次の和訳まで生じてしまう。「女は男が女を愛しているだけ男を愛する事は無い」という様な文は、仮に文法的に正しいとしても、とても日本人の恋人同士の会話とは思えない。(喜多 44)

[3.5] 主語自体の使用法も随分と進化して来た。明治の日本語のみならず、戦後までも「和文の主語は生物に限る」と教えられた。しかしながら、英語の影響下にあって、そのルールは殆ど無視されるに至る。それも四段階の過程を経ている様である。

(3.5.1) 昔から或る程度、許容された構造には、主語の擬人化があった。例えば、「恋は盲目」、「死が待っている」、「誰が為に鐘が鳴る」、或いは「村は寒気の底へ寝静まってゐた。駒子の叫びは島村の身内を貫いた。」(雪国、藤田 362) 等である。

(3.5.2) 擬人法が更に進化すると、擬人法とは言えない表現でも抽象名詞が主語役を果たす様に成る。以上で見た漱石の「英語に於ける知識は」もその一例だし、また新聞でよく見掛け様な「生産費の上昇は現定価を許さないところまで来た」(吉岡 63) というような例も挙げられよう。

(3.5.3) 無生物主語が更に強まると、物事が人間に対して能動的に働き掛ける文章にまで転回してしまう。「あの死亡通知が俺を戦争中へ連れ戻した」(吉田 118)、「失望は僕に勇気を与えた」(吉田 105) 等である。

(3.5.4) やがて、全く日本語に存在しなかった構造が現われる。それは、無生物や抽象名詞を主語にし、使役動詞を以て、人間を強制的に目的語にするという、如何にも英語らしい構造である。例えば、「知的好奇心と観察力は彼をして理想的な記録者たらしめている」(吉田 107)、「劣等感が彼をテレさせた」(吉田 105)、そしてよく引用される「何が彼女をそうさせたか」(=What made her do it?) (吉岡 62) 等である。

この [3.5] 過程で見られる様に、元来の文法原則を逸脱し、日本語の主語が段々英語に接近して来ている。言い換えれば、抽象名詞や無生物主語を許さない限り、それらを前提とする哲学、無機化学、意味論や論理学等が不可能に等しいので、英語のみならず現代科学が持たした結果とも言えよう。ところで、最後の「何が彼女をそうさせたか」という例文中でも、もう一つの進化が伺える。

[3.6] それは、伝統的日本語に無い「人称代名詞」である。面白い事には、人称代名詞を使用するに至る過程も二段階に互って行なわれてきている。幕末までは、「あの人」という表現を時々使用したものの、「彼、彼女、彼等」等は滅多に使われなかったのである。しかし he, she, they を和訳する為に「彼、彼氏、彼女、彼等」が使われ始めた。ところが、当分の間は、これらの言葉は未知の第三者ないし対等に近い身分の者にしか当てはめられず、目上の者、子供等に対しては許容されなかったのである。最近では(生徒が教師について)「彼から受けた授業は倫社だった」だの、(お母さんは息子について)「彼はけがしやすい子供だった」だのが流行している。日本語としては全く好ましくないとは言え、まるで指し示されている第三者と話者とが平等かの様な表現は、英語の影響下で定着しつつある。(吉岡 68)

[3.7] 尚、他の関係代名詞についても、二段階の進化が見受けられる。英語の翻訳が盛んになった明治中期から、関係代名詞を「する所の」と和訳する様になった。(喜多 44) 例えば「高橋さんが認識する所の唯一の世界」(吉岡 64) や「マスプロ的教育がもたらす所の教師への不信」(藤田 362) 等である。そして戦後、「する所の」を更に省略し、「認識する世界」とか「教育がもたらす不信」に変化してきた。確かに和訳する為に便利な工夫であろうが、これも英語教育によるところが大きいと言わざるを得ない。

4. 動詞の進化

[4.1] 欧米の言語に比べて、日本語は使役動詞や能動態より受け身を、他動詞より自動詞を好むと言われて来た。動作者、動作因が物事を起こすのではなくて、物事が自然に起きるので

ある。しかし [3.5.4] 「何が彼女をそうさせたか」 (=What made her do it?) で見た様に、抽象名詞や無生物さえも主語になるのならば、因果関係が明確になるだけでなく、結果的にせよ使役動詞が増えて行く事にも成る。(藤田 363) 特に英語の背景が強く感じられるのは、物事が人間に感情的な影響を与える処であろう。例えば、「excite, impress, surprise, anger, interest」等の動詞を和訳する際に、「興奮させる、感動させる、驚かせる、怒らせる、興味を持たせる」等と訳さねばならない。従って、この様な動詞の用法も日本語の中で市民権を得るに至る。その傾向が一步進んで、普通自動詞があるにも拘わらず、英語らしく「させられる」体まで使うに及んでいる。例えば「中でも驚かせるのが地下街の出現」や「横井さんの話に本当に感動させられた」等がある。(吉岡 66) そこで「話に感動した」という日本語が以前よりあるのに、漱石は「感動させられた」と意識的に英語らしく書いているが、最近の学生達は異国風な効果を得る為でもなく、受験勉強の当然の結果としてこのような言い回しを使っている。

[4.2] 面白い事に、これとは一見逆の例も時として見られる。それは人間関係を重視するか、因果関係を重視するかに関わる現象である。従来 of 日本語に於ては、大人であればある程、自動詞より責任ある他動詞を使う礼儀が昔からあった。何も悪くなくとも、「悪かった」と謝ったり、部下が悪い事をした場合に上司が辞任したりする様に、子供なら責任逃れで「水がこぼれた」とか「瓶が落ちた」というところで、大人なら「私がこぼした」「私が落とした」と言う事になっていた。これは人間関係を重視する結果と言えよう。

例えば、AさんがBさんから炬燵を借りたとして、その炬燵が使っている内に機能しなくなったと想像しよう。お返しする際に、Bさんに対して、Aさんは「炬燵が壊れた」と言うのか「私が壊した」と言うのか。前者の場合、まるで貸し主が欠陥商品でも貸してくれたかの様に、全く責任を取らない態度であるのに対して、貸し主は「いやぁ、貸して上げた時にちゃんと使えたのに、どうしてくれるのかよ」と思ってみてもおかしくない。しかし「私が壊した」と言われたら、「いやぁ、お前はわざと壊したのではなく、恐らく発熱燈の寿命がきていたのだろう」と、逆に相手の気持ちを思いやりながら話す方が人間関係は円滑に進む場合が多いのではなからうか。

しかし、戦後教育を受けている日本人は、人間関係重視よりは、科学的因果関係重視形に変化した。単純に(子供の様に)考え、「自分で壊したのではないので、壊れたと言うのが当然だろう」と、日本語の礼儀を知らない多数の若者が言う様である。ただ単に英語の文法を真似するのみならず、英語の発想まで導入してしまう事になる。そこで問題となるのは相手の心構えであろう。癌告知、インフォームド・コンセント等も然り、相手に対して事実さえ伝えれば用が済んだと、お互いにあっさり思える文化と、事実とはもかくとして、患者の精神状態や人間関係を最大限に重んずる、建前と本音を区別する文化とは、やはり根本的に違う。ここで、英語の文法のみならず、英語の発想まで影響している様である。この一例を考えてみても、言語の含蓄は大変深いところにまで及ぶのである。(Mizutani)

[4.3] 能動化のみならず、動詞の時制も翻訳の影響を受けている。

(4.3.1) 例えば、英語動詞の進行形を「しつつある」とか「している」と和訳する様に指導されている。この様な表現自体は元来の日本語で余り見られないものである。(古田 90) その

表現自体がぐんと増加したばかりか、NHK 放送でも「進行中である」というべき出来事を「進行形である」と言うまでに至っている！（藤田 362）

〔4.3.2〕又、未来表現が動詞的にも形容詞的にも頻度を増している傾向にある。無論、相手の同意を得る為、或るいは将来の確率を示す為に、「でせう」、「であろう」等の表現は以前からあった。今度は、それを更に幅広く英語の時制に合わせる様に適用されてきた。例えば、would be を「重大な別れ道となるであろう事を予想した」とか、must have been を「主人のみじめであつたろう青春を思い」等の例を思い浮かべる。（吉岡 65）

〔4.4〕以上の点に因んで、日本語の仮定法も進化してきた。例えば、as if 表現を「まるで何々であるかのやうに」（藤田 362）、又 if not ... would not have 表現を「座敷の中へ入って来なかったなら、味わう事が出来なかったであろう」と和訳する場合である（芥川、古田 90）。この類の表現も、別に日本語で表現出来ないものではなかったのであるが、和訳の関係でこの発想と構造が増えたのである。

〔4.5〕否定文も英語を反映する様になった。英語の not necessarily 等を念頭に置いて、漱石は「とは限らない」や「とは決らない」を多用しているが、最近この様な言い回しも極く当たり前になって来ている。（藤田 362）同様に二重否定も増え、「せざるべからず、なきにしもあらず」等（喜多 44）多く見られる様になった。その代わり、普段、「～ねばならぬ、せんならん、しないといけない」という二重否定詞の表現は少しずつ「する必要がある」という英語に近い形に姿を変えつつある。

〔4.6〕名詞や動詞という単語より、文章構造自体が変化し難いものである事は、様々な外国語の例からも分かる。例えば、ヒンディ語も多数の英語の単語（外来語）を有するが、ヒンディ語の SOV 構造は殆ど変化しない。ところが、机上の英語翻訳技術がインドよりも必死な日本の教育制度は、時々動詞の順序にまでかえり、SVO 文さえ生んでいる。例えば、「軍曹が叫んだ『止めろ、馬鹿な真似!』」。この例は二重の SVO 構造とも言えよう。カッコの中の言葉は「叫んだ」という動詞の目的語であると同時に、「馬鹿な真似」は「止めろ」の目的語である。しかし、日本流に「馬鹿な真似を止めろ!と軍曹が叫んだ。」と書かなくても、SVO 文に違和感を感じない日本人が多くなっている様である。

5. 英語の発想によるその他の特徴

〔5.1〕目的語の明確化

〔5.1.1〕名詞、主語、動詞等の明確化と同様に、目的語の明確化も翻訳に原因があると言われている。〔3.3〕で主語の繰り返しを見たが、文章が長いと、目的語をも繰り返す例が最近目立つ。例えば「読書週間であることを {長文} …これを私は自分に警戒したい」（吉岡 69）という例が挙げられる。

〔5.1.2〕尚、日本語の伝統的教科書に於ては、「聞こえる、見られる」等の可能動詞、「飲みたい、食べたい」等の願望表現、及び「終わる、分かる」等の特種動詞それぞれの目的語に、「を」よりは「が」を付ける事になっていた。しかし英語和訳教育の関係で、最近この様な助

詞の用法にかなり乱れが生じており、「あれを見られる」「これを飲みたい」「それを分かる」等、英語の様に目的語となる名詞に「を」を付ける慣習が流行っている。

(5.1.3) この傾向が更に強化されると、英語で動詞～目的語構造を使う場合、たとえその和訳は形容詞や形容動詞を使用しても、目的語に「を」を付けてしまう例が見られるに至る。「水を欲しい」、「私はビールを好き」、「受験生を嫌いだ」等の例を見付ける事が出来る（吉岡66）。

[5.2] 以上の様に、助詞の用法をやがめてしまうだけなら未だ許容範囲内であろうが、助詞自体は英語に存在しない。特に口語の場合、日本語も最近助詞を省く傾向を見せている。例えば「僕そんな事知らない」とか「君あの本読んだ事ある?」という例が挙げられるが、この助詞省略も単なる口癖や言語進化による簡略化だけではなく、英語の影響とも推察されるのである（喜多44）。

[5.3] [4.6] のSVO化と合併すると、更に「僕知らないそんな事」とか「君読んだか、あの本?」に変身し、極めて英語らしくなるのである。無論、会話の方が活字に先行するが、会話で許される言葉は、将来、文書でも容認される事になるであろう。

[5.4] 複数形は、元来日本語に殆ど無かった。いわゆる大和言葉だけでは（ポリネシア語と同様）「山々、木々、人々」等、繰り返して複数を表現していた。中国語の影響によって、中世日本語は「一枚、一杯、一台、一着」等、物の種類ごとの可数名詞を付ける様になった。そして明治になって、名詞自体に「～ら、～たち、～ども」等、複数を表す接尾辞を付けるに至った。無論、この構造自体は明治以前にも存在はしていたが、英文和訳の影響で、翻訳文でない場合にも数多く使用される様になったのである。

[5.5] 言うまでもなく、冠詞も本来日本語に存在しなかったが、英語の冠詞を和訳する試みで、a, anの代わりに「或る」、theの代わりに「その、そのの」、そしてsomeの代わりに「幾つかの」等の訳語を付けられる様になった。しかし最近では、theをそのままカタカナ化して、「ザ・フー、ザ・ウェーブ、ザ・タイガース」等の固有名詞を始め、「ザ・夕べ、ザ・ビデオ」等まで使用される様になった。これは勿論英語に限らず、フランス語の「ル」、スペイン語の「ラ」、等を付加する事と同様、異国風な感じや特別な雰囲気を出す為に利用されている訳であるが、その中でも英語の例が圧倒的に多いのである。

[5.6] 複数や冠詞は、従来の日本語では考えられなかった数や特定性を示す。同様に「や、だが、けれど」等、日本語の接続詞は英語のor, butよりずっと曖昧である。英語の排他的orを正式に和訳しようと思えば「や」は間違いで、「又は、或いは、それとも、さもなくば」等の表現を利用せざるを得ない。これら自体が馴染みのない言い回しで、とても英語のorの様に至る処に活用出来るものではない。その為か、特にメニューや説明書等で、日本語の中でもorをそのまま使う頻度が高まりつつある。

逆説のbutについても同じ事が言えよう。日本語の「だが、けれど」等は必ずしも逆説的とは言えず、絶えず曖昧なままに終わってしまうのに対して、英語のbutはいつも「その反対に、その反面、それにも拘わらず」等の響きを内在している。これらの表現を簡単にbutと言える事で、最近若者向きの文書のみならず、学生の提出する日本語のレポートの中でも

butが目立っている。

[5.7] はっきりした否定が好まれていない事は、日本語の広く知られている特徴である。『ノーと言わず、拒否する17の方法』と題する論文がある程の現象である。しかし、『ノーと言える日本』を始め、「ノーモア広島」「Noモノレール」「ストップ・ザ・モンジュ」等まで、否定や拒否を表す言葉として、日本語よりは英語のno, stop等の方が印象強い様である。ひょっとしたら、これも相手の気持ちや人間関係よりも事実や自己表現を重視するものかも知れないが、いずれにしてもその言語進化自体は無視出来ない。

6. 展 望

上述した事は、多くの日本人研究者の気付かれたものを纏めたものであるが、これ意外の現象も恐らく沢山あると考えられる。又、これから日本人が外国と交流すればする程、日本語の自然進化は当面続くであろう。完全な予言は出来ないにせよ、どの方面の進化を考えられるであろうか。

[6.1] 上述した事態の延長線上、日本語の有名な曖昧さが僅かながら減退していく事であろう。その一つは、誤解を招く曖昧さで、例えば「食う物が無い」というレストラン客の冗談の様に、食べられる料理が無いのか、それともお箸が無いのか、分からない場合である。日本語では「何をして下さい」とか「あの、あれ」と言っても、相手と親しければ、はっきりしなくてもいいかも知れないが、英語等では到底通用しない。言葉を外国語に訳して始めてその曖昧さが認識され、明確にしないと満足に翻訳も出来ない事は、もはや周知の通りであろう。

[6.2] 日本語のもう一つの曖昧さは、婉曲表現にも近い、断定調を避ける傾向にある。「感じ、風、空気、雰囲気」等を大事にし、「何となく、どこからともなく、何気なく」「分かる様な気がする」「とは言えなくもないのではなからうか」等、遠回しの言い方の方が無難で綺麗な表現とされる。場合によって、相手の顔色を伺いながら文末の動詞を途中でも変えられる程である。しかし、このいずれの工夫も現代英語には見当たらないし、かえって誤解を招く原因とさえなりかねない。そして、商業コミュニケーションの多くの場合、手紙、電話、FAX、電子メール等を主用とするので、相手の顔色よりは、事実や条件の方が大切になってくる。従って、これからの日本語は、益々相手の気持ちを探るよりは、英語らしくはっきりと事実中心に進化していくであろう。

[6.3] 徳川幕府が戦国時代に平和をもたらせたのは、何と言っても力関係によるものであった。上下関係を明確に決定し、士農工商（+非人）、男尊女卑、亭主関白等、王陽明学を利用して、「敬い」の思想を平民に押し通してきた。明治になって幕府が倒されても、尊皇攘夷等の為に上下関係は用いられた。何しろ日本語の言語構造に内在する概念であったので、法律以前に、上下を考えずには喋る事さえ出来ない状況であった。いくらアメリカが新憲法を書き、日本に民主主義を教えようとしても、上下関係を重んずる日本語自体が頭脳のフィルターになっている限り、「平等」等あり得ない。

幸不幸は別に、世紀末の若者の日本語は上下関係を殆ど無視している。尊敬語、謙讓語、丁

寧語、謙遜語等を正しく話せないだけではなく、使う意図も無いと言う。「特に尊敬してもしないのに、何故年寄りに敬語を使わなければいけないのか」と言う若者さえ居る。親や教師も若者を正さないし、もしかしたら親も教師自身も正しい日本語に自信が無いのかも知れない。そして若者にとって、親も教師も年寄りも皆「さん付け」になり、「あなた」になり、友達の様に扱われてしまう。女性も男性も「僕」と「君」で交流するのみならず、方言が無くなると同様に、男女の言葉が無くなる傾向にある。いくら社訓で電話応答や言葉遣いを教えようとしても、母語としては身に付かない。ここまでくると、逆戻りは不可能であろう。戦前の様な上下関係を持つ日本語は消えつつあると言わざるを得ない。

[6.4] その反面、或いはその結果として、力関係ではなく、話し合い、納得、論理等が重視される様になる。昔から、上下関係が強い企業、社会、教授会などでは、話し合っても無駄な事が多いので、論理自体が見下され、「屁理屈を言うな」の一言で済まされる場もあったが、益々相互理解と論理的な話し合いによって、役人が対等な立場で将来の政治や企業を担って行かざるを得ないであろう。既に別の論文で日本語の論理構造の問題を多少分析しているので、ここではこれ以上触れない事にするが、これは日本語にとっても日本社会にとっても大変な試練と言えよう。

[6.5] 世界の舞台で日本人も学会発表等する様になるにつれて、国際的な水準に従わざるを得なくなる事も見えている。例えば、論文を発表する際に、英語の概略を付けて、キーワード、索引、脚注等を標準文献形式に備えないと、いくら研究そのものが一流であっても、世界的な学会や雑誌に認められない。従って、論文を書く事は勿論の事、学問自体も、いわゆる「古典の感想文」から、先端研究を網羅的にカバーした上で、どれだけの根拠を以て物事が言えるかで評価されるものへと変化をとげている。日本語以外に通じない国学者の連想や言葉遊びの様な「学問」はもう長くないと言えよう。文献批判学にしても、歴史言語学にしても（言うまでもなく科学系統）、明解で標準的な方法論が望まれるに従って、日本語も少しずつドライで、さっぱりしてくるに違いない。

[6.6] これから、日本語が英語に近付く傾向は、これまで考えられなかった速度で進む。その原因はインターネットとその直訳の影響である。毎日パソコンで多くの若者がインターネットに繋がり、長時間世界中の情報やイメージを楽しむ時代になった。英語の読めない人は無論、速訳ソフトを導入するが、当然ながらこのソフトは、英語を英語の順番で、英語の癖を守りながら、非常に英語クサイ日本語に訳す。そして、その非常に英語クサイ日本語に、日本の若者がどんどん抵抗無く慣れていくのである。

ここで、誤解を避ける為に断っておくが、母国語の古典、古文書、或いは前世紀の新聞でも十分に読めない事は、筆者も残念に思う。しかし、毛沢東の様に言語の自然進化を速める事が出来ても、遅める事は至難の業である。生きる言語を支配する事の難しさを理解したら、現代進化しつつある日本語を無理に政治的に止める試みはしない。むしろ古典教育を強化して、昔の表現の美と意義を教えれば教える程、その表現は自然に残る様に成る。そして、いくら現代日本語が古典や明治文学から遠ざかっても、それでも尚、古典や明治文学をそのものとして楽しめる様に、次の世代を育てるしかないのではなからうか。

およそ100年程前から、日本の翻訳はどうあるべきかという討論は二手に分かれていた。純日本語派（内田魯庵、坪内逍遙、長谷川二葉亭、等）は、「いくら翻訳でも何よりも先ず完全な日本語にせねばならぬ」と主張した。他方、進歩的国際派（生田長江、小宮豊隆、野上豊一郎、宇野浩二、等）は「和文としては異例であっても、どこまでも西洋のものらしく移し替えなければ」と反論した（吉田 110-111 参照）。未だにその結論は出ておらず、むしろ大学入試を採点する度に、より自然な日本語が良いのか、直訳が良いのかと、論争が再燃する位である。しかし戦後の英語教育は、どちらかといえば、機械的、計算的なもので、日本語らしい奇麗な表現を考える前に、単数・複数等の英語の特徴を一つ一つ把握しているかどうかに重点を置いてきたのである。又、この傾向が機械翻訳や電子通信によって更に強まる見込みである。言い換えれば、日本語における英語の影響を避けようとしても、英語や翻訳自体から遠ざかる事は非現実的なので、和訳の中で日本語特有の魅力を如何に教えられるかが新教育課題となるであろう。

参 考 文 献（逆年代順）

- Sayama, Kohichi, Abe Jun-ichi: Interpretation of Japanese Nominal Tautology, *Japanese Journal of Psychology*, Vol. 65, No. 1, 1994. 4, pp. 25-33.
- Takahashi, Satomi: Comprehension Process of Second Language Indirect Requests, *Applied Psycholinguistics*, Vol. 15, No. 4, 1994. 12, pp. 475-506.
- Fernald, Anne: Approval and Disapproval: Infant Responses, *Child Development*, Vol. 64, No. 3, 1993. 6, pp. 657-674.
- Koizumi, Reizo, Matsuo Kaoru: Longitudinal Study of Attitudes and Motivation in Learning English, *Japanese Psychological Research*, Vol. 35, No. 1, 1993, pp. 1-11.
- Gudykunst, William B. Ed.: *Communication in Japan and the United States*. Albany, NY: SUNY Press, 1993, 330 pp.
- Akiyama, Michael: Cross-Linguistic Contrasts of Verification and Answering among Children, *Journal of Psycholinguistic Research*, Vol. 21, No. 2, 1992. 3, pp. 67-65.
- Becker, Carl: Language and Logic in Modern Japan, *Journal of Chinese Philosophy*, Vol. 18, 4, 1991, pp. 441-473.
- Kuroda, Y., Suzuki, T.: Arabic, English, and Japanese Languages and Values, *Behaviormetrika*, Vol. 30, 1991. 7, pp. 35-53.
- Sasaki, Yoshinori: English and Japanese Interlanguage Comprehension Strategies, *Applied Psycholinguistics*, Vol. 12, No. 1, 1991. 3, pp. 47-73.
- Ohta, Amy Snyder: Evidentiality and Politeness in Japanese, *Issues in Applied Linguistics*, Vol. 2, No. 2, 1991. 12, pp. 211-238.
- Hildebrandt, Herbert: Communication Through Foreign Languages, *Journal of Asian-Pacific Communication*, Vol. 2, No. 1, 1991, pp. 45-67.
- Marriott, Helen E.: Native Speaker Behavior in Australian-Japanese Business Communication, *International Journal of Sociology of Language*, Vol. 92, 1991, pp. 87-117.
- Tsumuro, Mitsue: Why do Children Change Intransitive Verbs into Transitive? *Japanese Journal of Educational Psychology*, Vol. 36, No. 4, 1988. 12, pp. 291-296.
- San Antonio, Patricia M.: Social Mobility and Language Use in an American Company in Japan, *Journal of Language and Social Psychology*, Vol. 6, No. 3-4, 1987, pp. 191-200.

- Haarmann, Harald (Hitotsubashi) : Verbal Strategies in Japanese Fashion Magazines, *International Journal of Sociology of Language*, Vol. 58, 1986, pp. 107 - 121.
- Grabe, W., and Kaplan, R. B. : Science, Technology, Language and Information, *Social Science Information Studies*, Vol. 5, No. 3, 1985. 7, pp. 99 - 120.
- 小中秀彦 : 英語化された日本語 [英文]、『日本大学理工学部一般教育教室集報』、Vol. 37、1985. 3、pp. 75 - 83.
- 吉田 信 : 英文直訳体について 無生物、抽象観念を主語に取る場合、『愛知大学文学論叢』、Vol. 80、1985. 12、pp. 101 - 132.
- 薄井良夫 : わが国の英語教育 訳読式教授法と翻訳について、『英文学論叢』(日本大学英文学会)、Vol. 32、1984、pp. 157 - 166.
- Haarmann, Harald (Hitotsubashi) : The Role of Ethnocultural Stereotypes and Foreign Languages in Japanese Communication, *International Journal of Sociology of Language*, Vol. 50, 1984, pp. 101 - 121.
- Mizutani, Osamu : *Japanese : the Spoken Language in Japanese Life*. Tokyo : The Japan Times, 1981, 180 pp.
- 柳父 章 : 西欧的発想と表現—翻訳で造られた日本「文」、『国文学—解釈と教材の研究』、Vol. 25、No. 10、1980. 8、pp. 46 - 49.
- 佐々木達夫 : 明治中期英語学習における翻訳文体とその社会的機能について、*Artes liberales*、Vol. 26、1980. 7、pp. 35 - 44.
- 藤本周一 : 解釈と〈翻訳〉と英語教育、『大阪経大論集』、Vol. 115、1977. 1、pp. 84 - 102.
- 藤田正明 : 日本語への英語の影響、『商学集志』、Vol. 44、1974. 12、pp. 359 - 366.
- 吉岡正敏 : 現代日本語における欧文脈の影響 「翻訳体」の日本語化、『言語生活』、Vol. 259、1973. 4、pp. 62 - 69.
- Langendoen, D. Terence : Interference between Language Patterns, *Practical Anthropology*, Vol. 15, No. 2, 1968. 3, pp. 79 - 85.
- 古田東朔 : 訳語と翻訳文体、『国文学』(学燈社)、Vol. 8、No. 2、1963、pp. 85 - 91.
- 喜多史郎 : 外国語教育が日本語に与えた影響、『言語生活』、Vol. 67、1957、pp. 34 - 44.
- 速川 浩 : 日英両国語における自国要素と外来要素、『小樽商科大学人文学研究』、Vol. 7、1954、pp. 1 - 25.